2023年度　サポートシステムあゆみ　事業報告

（生活介護・居宅介護・重度訪問介護・行動援護・同行援護・地域生活支援事業
インフォーマルサービス）

施設長　松山徹

５月下旬から新型コロナウイルスが５類になり、世間は少しずつ活動の制限を解いてきた。以前の様に利用者・職員・地域の方々等と一緒に、イベント活動を再開したいという思いはあったが、コロナウイルス感染症が落ち着いた訳ではなかったので、規模を縮小してイベント活動を行った。

コロナウイルスにより利用者・職員が感染し、通所を休む事はあったがクラスターの発生はなく、感染拡大が起こることはなかった。

７月に増築が完了し、新棟に放課後等デイサービスの事業が移転したため、サポートシステムあゆみは、生活介護、移動支援、行動援護、同行援護、重度訪問介護のサービスとなった。そこで、生活介護の定員を２０名とし、オープンスペース‘AYUMI’から「がじゅまる班（元園芸班）」を移転した。利用者、職員の異動はあったものの、大混乱もなくスムーズに移転した。これにより大人の活動場所と子供たちの活動場所の区切りがつき、お互いそれぞれの特性を尊重した事業展開が可能となったと共に、万が一の感染症への対策も取りやすくなった。

職員研修について、外部研修は一部に留まった。内部研修においては、オープンスペース‘AYUMI’との共催による新人研修や２ヶ月に１回の職員研修を行った。

【生活介護事業】

（ふきのとう班）

８月と１１月に利用者１名ずつが家庭の事情で他施設に入所した。また、数名の利用者が体調不良から約１ヶ月～２ヶ月の間長期療養をされた。今後、特に利用者の年齢が全体的に上がってきていることでの健康管理・健康維持が課題である。

同法人内での移動もあり、５月と１月にオープンスペース‘AYUMI’から１名ずつ移動してきた。現在ふきのとう班所属の利用者は１３名である。

活動としては、曜日によってプログラムを組み立て、利用者の身体機能低下防止や、体を動かし体幹を鍛えるプログラムも取り入れてきた。気候の良い時期は外へ散歩に出かけたり、ドライブに出かけたりと、利用者の人達が五感で季節を感じられるように工夫をしてきた。

秋からドッグセラピーをふきのとう班と、がじゅまる班でスタートした。最初は犬に対して怖がっていた利用者も、回数を重ねるうちに犬へ近づけるようになったり、触れるようになったりと目に見えて変化を感じられるようになった。引き続きドッグセラピーを継続していく。

（がじゅまる班）

４月に園芸班から名前を変え、７月からサポートシステムあゆみの施設へ移動してきた。活動内容に大きな変化はなく以前の内職は継続している。午前中に内職を終わらせ、午後から身体機能低下防止やリラックスを目的とする室内運動や散歩、ミュージック等を行った。

感覚過敏な利用者もいるため、パーテーション等を使い全体的に静かな状況で作業ができるよう配慮した。移転後もスムーズに活動できている。ウッドデッキに椅子やパラソルを準備し、リラックスできる環境を作り、今までにない楽しみ方もできている。

イベント関係においては、夏にふきのとう班と合同で夏祭りを開催し、くじ引きやゴルフ、輪投げ等を行った。コロナ禍でなかなかイベントが出来なかったので、みんなで祭を盛り上げ、楽しむことができた。

【居宅介護・行動援護・同行援護】

居宅介護は、継続的に利用されていた方が、途中から他施設へ移転され、全体の利用数は前年度より下回った。

行動援護はコロナ禍で外出先の制限を解除し、感染状況の落ち着きを見て、近郊への公共交通機関での移動やプール、銭湯の利用等コロナ前の状況に戻しつつ、サービス提供を行った。その結果、昨年度に比べて利用回数や利用時間を上回ることができた。

職員数は少ないが、出来る限り利用者のニーズに応えている。今後は家族や本人のニーズで外出支援（通院支援も含む）が増えることが予想され、限られた職員数でどのようにサービス提供をしていくか検討が必要である。

同行援護は２名の利用者が継続して利用されている。

【地域生活支援事業（移動支援】

移動支援は行動援護同様に活動範囲の制限を解除した。利用時間数や回数も昨年度に比べて大幅に増加した。ウォーキングやお出かけ、買い物等のニーズも増加傾向にあった。

【インフォーマルサービス】

インフォーマルサービスを「ちょこっとステイ」として、施設支援終了後等に実施した。パズルや漢字の練習、塗り絵等をし、ゆったりとのんびりできるよう利用者のニーズに沿ったサービス提供を行った。また、「ちょこっとステイ」後の送迎や、個別のニーズに応じて送迎サービス等公的支援にないサービスを行った。

以上